

ビジュアル・ナラティブ・アプローチのための方法論上の基礎

—ロラン・バルトの『映像の修辞学』を手掛かりに—

横山 草介

Methodological Foundations for a Visual Narrative Approach

Sosuke Yokoyama

要旨：

本稿の目的は、ナラティブ・アプローチの今日における展開の1つに位置づけられるビジュアル・ナラティブ・アプローチの方法論上の基礎を固める作業に取り組むことにある。本稿の論究を通して、視覚的なイメージの分析には社会-文化-歴史的な規範性を伴う言語的な意味づけのプロセスが関わってくるものの、言葉やテキストがイメージを構成するすべての要素を汲み尽くせるわけではなく、汲み残されたイメージの領野には意味の不在領域が広がり、そこには多様な解釈可能性が残されていることが明らかとなった。また、この含意のもとにビジュアル・ナラティブ・アプローチは何らかのテキストを視覚的に表現し直して探究する実践——テキストに挿絵を添える実践——ではなく、視覚的なイメージを触媒として多様なテキストや解釈実践が生成されるという理解のもとではじめてその方法論上の意義を明らかにすることが示された。

キーワード：

ビジュアル・ナラティブ、イメージにおける共示の意味、イメージにおける外示の意味

1. 問題と目的

人々の生き姿や彼らの生きる生活世界を理解するための探究の方法論上の主概念にナラティブという概念を据える試みが心理学において注目を集めたのは1980年代のことであった。学説史においてこの動向は「ナラティブターン（物語への転回）」と呼ばれる（Bruner, 1986; Polkinghorn, 1988; Sarbin, 1986; やまだ, 2000; 横山, 2019）。以降、ナラティブという概念を研究の方法論上の土台に据えて為される研究は、いくつかの道標となる仕事を参照しつつ「ナラティブ・アプローチ (narrative approach)」と総称され、質的研究の一領域を形成してきた。

ナラティブ・アプローチの展開においてナラティブ (narrative) という概念は、人が「語る」という行為——行為としての語り——と、語りの所産として生成される物語——所産としての物語——の複合概念として理解されるのが一般的である。この概念はストーリー (story) という概念と同義に扱われることも多いが、ナラティブという概念が「行為としての語り」に重心を置き、語りの生成的側面に焦点を当てる傾向があるのに対し、ストーリーという概念は「所産としての物語」に重心を置き、物語の構造的な側面に焦点を当てる傾向がある。ただし、両者の区別について個々の定義問題に分け入っていくことは本稿の目的とは異なる。した

がってここではナラティブという概念が人間科学の探究の方法論として用いられる際には「行為としての語り」と「所産としての物語」の複合概念として用いられ、その両方が分析や探究の対象となるという点を確認するに留める。

他方、ナラティブ・アプローチの今日の展開においては、ナラティブという概念から印象される言語至上主義的な側面に対する指摘も為されてきた。ナラティブは一般に言語の使用を前提とした方法論という印象を強くしているが、人が自らの経験や出来事を表現する仕方には言語以外の方法もあり得るとの指摘である。こうした指摘を受けて展開してきたアプローチの一つがビジュアル・ナラティブと呼ばれる方法論である。

我が国のナラティブ・アプローチを牽引してきたやまだ（2000）に依拠するなら、ナラティブは経験や出来事を有機的に組織立て、意味づける行為として定義される。この定義を転じ、ビジュアル・ナラティブは経験や出来事を視覚的なイメージを介して意味づける行為として定義される（やまだ, 2018; 横山・関山, 2020, 2022）。

ビジュアル・ナラティブと呼ばれる方法論の我が国における展開はやまだの研究に負うところが大きい。やまだは Image Drawing Method と呼ばれる手法を用いて母子関係、死生観、病の経験、人生といった主題に研究協力者が描出した視覚的なイメージを介して接近する研究を行っている（やまだ, 1988, 2002, 2010, 2018, 2023）。また、横山・関山（2020, 2022）は、やまだの Image Drawing Method を展開し、保育者が自らの実践について抱く実践観にビジュアル・ナラティブの方法論を用いて接近している。

だが、視覚的なイメージを対象とした分析

は、言語データを対象とした分析とは異なっている。そこには表現それ自体（シニフィアン）と表現が指示するもの（シニフィエ）との解釈上の照合をめぐる固有の難しさが伴われる。言い換えれば、イメージが纏う多義性、すなわち、ある表現が、いったい何を意味しているのか、という問いをめぐる難しさがある。本稿の目的はこの難しさの所在を明らかにするとともに、視覚的なイメージの分析を伴うビジュアル・ナラティブの探究に関わる方法論上の基礎を確認することにある。

さて、ビジュアル・ナラティブ・アプローチに固有の困難を明らかにし、視覚的なイメージの分析を伴うビジュアル・ナラティブの探究に関わる方法論上の基礎を確認する作業に臨むにあたって本稿が依拠するのは、ロラン・バルト（Roland Barthes）による『映像の修辞学』（バルト, 2005/1964）と題された論考である。バルトの同論考は、視覚的なイメージの分析を如何に進めるべきか、という問いに対し、ソーシャル言語学における「シニフィアン（記号表現）」と「シニフィエ（記号内容）」の概念を出発点に論究を進めたものであり、ビジュアル・ナラティブ・アプローチの方法論上の基礎を確認する作業に有用なテキストとなっている。

2. シニフィアンとシニフィエのイメージ論への展開

ソーシャル研究の先覚として知られる丸山（2008）は、記号が如何に我々に作用するか、という問いに対し、記号それ自体の表現（シニフィアン）と、その記号が指し示す内容（シニフィエ）とを概念上区別しつつ、言語に至っては、第一にある言葉が内包する表現と意味との結びつきが恣意的なものであり、第二にある言葉が世界を指し示す意味の範囲もまた恣意的な

ものであること（言語における二重の恣意性）を指摘した点がソシュールの言語哲学における1つの偉業であると言う。丸山（2008）によれば、言葉を用いた表現も、言葉以外を用いた表現も、いずれも、表現それ自体が何かしらのシニフィアンとシニフィエを持つという点においては共通する。ただし、言語においてはシニフィアンとシニフィエとの結束強度と記号の実際上の意味作用に対して社会-文化-歴史的な規定力がより強く働いている。他方、イメージにおいてはシニフィアンとシニフィエとの結束強度は言語におけるそれと比して弱まり、記号の実際上の意味作用においてもイメージが発するメッセージは多義性を帯びたものとなる。

さて、以上に要約されるソシュールの言語理論におけるシニフィアンとシニフィエとの概念上の区別を視覚的なイメージの分析に展開したのがロラン・バルトであった（バルト、2005/1964）。

バルト（2005/1964）は一枚の広告を例にとり、視覚的なイメージがその鑑賞者に伝えるメッセージの内実について構造的な分析を行った。以下ではバルトに倣って一枚の視覚的なイメージを取り上げ、彼の分析を辿り直してみることとする。ここに取り上げるイメージは日本の保育所に勤めるある保育者が「今現在、保育で大切にしていること」という主題のもとに描いたイメージ画である。

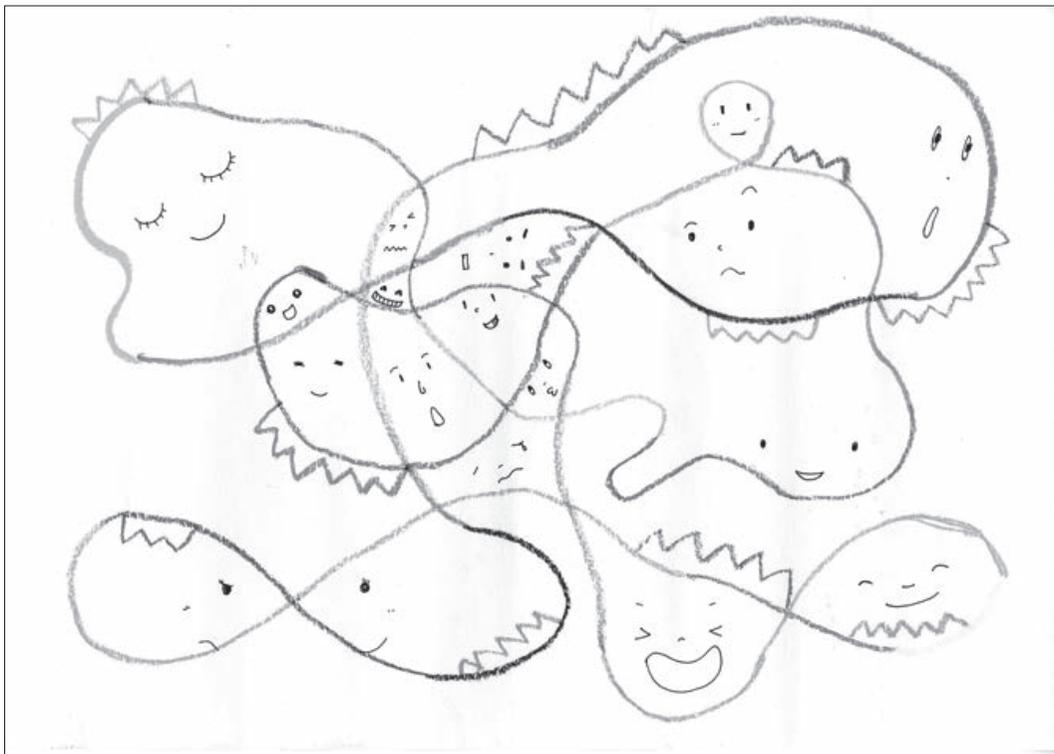


図1 今現在、保育で大切にしていること

図1に示すイメージ画には保育者自身によって語られた以下のような解説がある。

子どものやりたい、を実現したいなあっていう思いがあるので、ちょっと色んな顔を出した、描いたんですけど、あの、色んな感情って、ね、子どもの感情って喜怒哀楽のあの4つのなかで割り切れない、なんかもっともっと多様なところを、あの一、見てもいきたいし、こうちょっとギザギザ描いたのは、やりたいやりたいっていうのが内に秘めてたり外に出してたり、するんだけど、それをこうキャッチしていきたいなあっていう、図です。

(Fさんへのインタビュー, 2021. 9. 30.)

このような視覚的なイメージをどのように解釈するか、という問いがビジュアル・ナラティブ・アプローチの探究に課せられていると言えよう。以下、バルトの論考を頼りにこの問いに接近する。

3. イメージの構造的分析

視覚的なイメージが指示するものを読み取ろうとするとき、そこには言語記号と同様に「外示的な意味 (denotation)」と「共示的な意味 (connotation)」の両方が内包されている。例示した図1に基づいて述べるならば、そこには「さまざまな表情をもった顔」という描画それ自体が鑑賞者に伝える形どおりの意味 (外示的な意味: denotation) と「子どもの多様性の理解」という描画の背後に込められた象徴的な意味 (共示的な意味: connotation) とがある。

概念上のこの区別によって、我々はビジュアル・ナラティブ・アプローチの探究について

「外示的な意味 (denotation)」に焦点を当てた分析と「共示的な意味 (connotation)」に焦点を当てた分析とを区別して検討することが可能になるように思われる。例えば前者においては、描画それ自体の構成や配置、描かれたものの類型論を展開することが可能であり、後者においては描画のもつ象徴的な意味についての解釈学を展開することが可能であろう。とはいえ、例示した図1の描画にも明らかなように、個々のイメージが発するメッセージの多義性は定まった解釈の困難さを鑑賞者に突きつける。この点についてはバルトもまた次のように述べる。

イメージはどれも多義的である。イメージはシニフィアンの方面に表面に出ない形でシニフィエという《揺れ動く鎖》を持っていて、イメージを読み取る者がそのうちのあるものを選び、他のものには無知であっても差し支えない。多義性は意味に対する疑問を招き寄せる。

(バルト, 2005/1964, p. 21)

このイメージの多義性を統制する手段としてバルト (2005) は言語の力が有効に働くという。

4. イメージに添えられることば

ビジュアル・ナラティブ・アプローチは、ときに言語をまったく用いずに探究を進める方法論のように誤解される。だが、このアプローチは視覚的なイメージの解釈に言語の力を借りることを否定するものではない。重要な点は、イメージの解釈において言語がどのような役割を果たすか、という点にある。バルトはこの点について「投錨」という概念を使って説明を行う。

[多義性は意味に対する疑問を引き寄せる。] だからこそ、不確かな記号の不安と闘おうとしてシニフィエの揺れ動く鎖を固定するためのさまざまな技術が社会全体の中で発達するのである。言語的メッセージもそうした技術の一つである。外示的なメッセージのレベルでは言葉は直接性の度合いあるいは指示範囲の大きさの度合いが違っても、「これは何か」という問いに答える。それはある場面を構成する諸要素、あるいは場面そのものを素朴に同定するのに役立つ。.... ものに名前をつける機能というのは語彙集を用いて対象のできるだけすべての外示的意味を投錨することである。(バルト, 2005/1964, pp. 21-22 : [] 内筆者, 本文一部改訳)

イメージのもつ多義性に対し、そこに添えられた言葉は各々のイメージに対する指示の直接性や範囲の度合いに違いがあったとしてもそこに「なにが表現されているか」という疑問に答える。図1に示したイメージを例にとれば、イメージに添えられた言葉はそこに「いろいろな顔」が描かれていることを指示している。バルトは、少なくともそこに何が表現されているか、という問いに応える言葉の機能を「投錨」の1つの機能として「同定」と呼ぶ。

他方、イメージに添えられた言葉が各々のイメージの外示的な意味を同定するのみならず、イメージに込められた共示的な意味の理解へのガイドとして機能する場合もある。バルトはこうした言葉の機能を「投錨」のもう1つの機能として「誘導」と呼ぶ。

共示的なメッセージのレベルでは、言語的メッセージはものを特定するのをやめ解釈

を誘導する。それは一種の万力となって、共示的な意味があまりにも個人的な領域(すなわちイメージの照射力を制限する領域)、あるいは不都合な価値の方へと氾濫しないようにする。.... テキスト(文章部分)は読み手をイメージのさまざまなシニフィエの中で方向づけて、彼があるものを避けて他のものを受け取るようにする。

(バルト, 2005/1964, pp. 22-23 : 本文一部改訳)

図1に示したイメージを例にとれば、イメージに添えられた言葉は当のイメージに込められた「子どもの多様な願いや気持ちを受け止める姿勢への価値づけ」といった共示的メッセージを鑑賞者に理解させるガイドとして機能している。

以上に示したように、バルトはイメージに添えられる言葉やテキストが、イメージが発するメッセージの意味を同定したり、イメージについての特定の理解へと誘導したりする機能を「投錨」という概念によって説明した。だが、イメージに添えられた言葉やテキストがイメージを構成するすべての要素を汲み尽くせるわけではない。言葉やテキストによる説明は、イメージを構成する各々の要素に対して選択的な言及に留まらずを得ず、汲み残されたイメージの領野には意味の不在領域が広がることになる。

5. イメージにおける外示

さて、ここに言語やテキストによる説明から汲み残されたイメージの領野をどのように理解すればよいか、という新たな問いが現れる。

バルト(2005)はイメージにおける「外示的メッセージ」(あるイメージそれ自体がもつ形

どおりのメッセージ)と「共示的メッセージ」(あるイメージが象徴するメッセージ)とを概念的に区別した上で、純粋な意味での外示的メッセージを我々が受け取ることは困難であるという。というのも、我々はあるイメージを目にした途端に、そこに何かしらの象徴を探索し、特定の意味を読み取ってしまうからである。図1の例示においても、我々は当のイメージを目にした途端にそこに「さまざまな表情をたたえた顔」という象徴を読み取ってしまう。それゆえバルトは、言葉を厳密に使うならイメージにおける外示は実体を持ち得ず、それらはイメージにおける共示に対して関係的に措定するほかにないと言う。

[イメージにおける]外示的メッセージの特性は実体的なものではありえず、関係的なものにすぎない。まず第一に、それは共示の記号を(頭の中で)消し去った時にイメージの中に残っているもので構成される、いわば欠性的メッセージである。....この欠性的な状態は当然豊富な潜在性と対応している。それは意味の不在であるが、その不在にはあらゆる意味が充満しているということである。次に(先のものとは矛盾しはしないが)それは十分なメッセージである。というのも、それは描かれた場面の識別のレベルで少なくとも一つの意味を持っている。すなわち、イメージそれ自体の外示が十分な理解可能性を示している。(バルト, 2005/1964, pp.26-27 : [] 内筆者, 本文一部改訳)

上の引用に示されるように、イメージにおける外示的メッセージ(あるイメージそれ自体がもつ形どおりのメッセージ)は、イメージにお

ける共示的メッセージ(あるイメージが象徴するメッセージ)を仮説的に差し引いたところに残ったもので構成される。この意味においてイメージにおける外示的メッセージは欠性的である。だが、この欠性は否定的な意味を持つものではない。というのも、そこに残されるのはいまだ意味の定まっていないイメージの領野だからである。こうした趣旨のもとにバルトは、イメージにおける外示は意味に関わる豊富な潜在性を宿していると主張する。

一方、イメージそれ自体がもつ形どおりのメッセージとしての外示は、それ自身としてのメッセージを放っている。なぜなら、提示されたイメージはイメージの外側に位置づく背景からは視覚的に区別され、当のイメージに視線を向けるものに対して何かしらの意味を読み取らせようと働きかけてくるからである。この意味においてイメージそれ自体の外示もまた、それを見るものに対して一定の理解可能性をひらいている。

6. イメージにおける共示

さて、イメージにおける外示的メッセージが、イメージにおける共示的メッセージを仮説的に差し引いたところに残ったもので構成されるとするならば、イメージの解釈の大部分はイメージにおける共示の読み取りに関わることになる。では、我々はイメージにおける共示をどのように読み取るのであろうか。この点についてバルトは次のように述べる。

[イメージにおける共示的メッセージの理解に]関わっているのは通常の読み取りシステムであるが、その記号は文化的なコードから取り出されている。....このシステ

ムの特徴なところは、同じ一つのレクシー（同じ一つのイメージ）の読み取りの数が個人によって変わるということである。…それはイメージの中に心的エネルギーを投入した（実用的、国民的、文化的、美的な）さまざまな知に依存しているが、それらを分類して類型学を作ることもできる。まるでイメージが何人かの人の読み方を教えるかのようにすべてが運んで行くが、この何人かが同じ一人の個人の中に存在していてもまったく構わない。同じひとつのレクシーが異なる語彙集を動員する。（バルト, 2005/1964, pp. 34-35 : [] 内筆者, 本文一部改訳）

上の引用部でバルトは、イメージが内包する共示的メッセージの解釈は、それを鑑賞するものの社会-文化-歴史的な思考様式を動員しながら為されることを強調する。本稿の例示に基づくなら、図1のイメージが内包する共示の1つは「保育の実践における子どもの多様性の理解」というものであった。ここには、保育の実践において多様な子どもの姿を尊重するべきであるというひとつの文化的な価値観が浮き彫りにされている。

とはいえ、ひとつのレクシー（解釈の対象となるイメージ）に対して為される解釈は個々の鑑賞者によって異なり得る。すなわち、ひとつのレクシーの解釈に動員される社会-文化-歴史的なコードには幅がある。このことは、個人間における解釈の幅のみならず、個人内における解釈の幅においても同じように当てはまる。この点についてバルトは次のように述べる。

一人の人間の中には語彙集が複数共存している。これらの語彙集の数とそれを認識

していることがいわば諸個人のイデオレクトを構成しているのである。イメージにおける共示はこのように、深さはまちまちだが、（イデオレクトの）語彙集から取り出した記号を組み立てたもので構成されているのであろう。

（バルト, 2005/1964, p. 35 : 本文一部改訳）

上の引用部で言われるイデオレクトとは、諸個人がものごとの理解や解釈に際して動員する言葉の使用体系を指している。我々はイメージの解釈に際し、当のイメージが内包する共示的なメッセージを自らのイデオレクトを参照、動員しながら意味づけようとする。

ただし、バルトはこうした解釈や意味づけの実践が際限のない相対主義に帰結することはないと言う。彼はイメージの解釈にはイメージそれ自体が内包する共示と、それを鑑賞するものによる解釈との結びつきにおける何かしらの普遍項が存在していると主張する。そして、イメージの解釈に際して見出されるこうした普遍項のことを「共示項」という概念によって説明する。バルトはここに社会-文化-歴史的な思考様式の作用を仮定するのである。すなわち、イメージの解釈は社会-文化-歴史的な規範性を帯びたものとなる。

7. イメージの解釈

さて、我々はイメージの解釈に際して自らの持つイデオレクトを駆使しながら、目の前のイメージに潜在する共示項を探索する。そして、前節でみたようにイメージの解釈は少なからず社会-文化-歴史的な規範性を帯びたものとなる。だが、バルトの主張の重心は、解釈に動員される社会-文化-歴史的なイデオロギーの作

用にあるわけではない。彼が強調するのは、我々の解釈が社会-文化-歴史的なイデオロギーの影響を受けることは不可避であるが、それでもなお、我々が解釈の過程で探り当てた共示項がイメージ全体を埋め尽くすことはない、ということであった。言葉を換えて言えば、解釈はつねに別の解釈可能性を残しているのである。

共示項がレクシー全体を埋め尽くすことはない。読み取りがレクシーを洩らすことはない。さらに言うと（そしてこれが記号学全体にとって有効な提言となるであろうが）、レクシーのすべての要素が共示項に変わるわけではなく、つねにディスクールにはある外示が残っている。この外示がなければ、ディスクールは確実に不可能となるだろう。

（バルト, 2005/1964, p. 41 : 本文一部改訳）

解釈の実践が眼前のイメージのすべてを何らかの共示項で埋め尽くしてしまうことはない。裏返して言えば、イメージを構成するすべての要素が何らかの共示項へと翻訳されるわけではない。イメージをめぐるディスクール（談話）にはつねに解釈が汲み尽くすことのできない残余が生じる。バルトの言葉を改めて引くならば、そこにはイメージにおける共示を仮説的に差し引いたところに残されたもので構成される外示が残っている。この外示に残されているのは、いまだ意味の定まらないイメージの領野であった。イメージをめぐる談話は、解釈が汲み尽くすことのできない残余としての外示があることによって賦活されるのである。

さて、バルトに従って、イメージの解釈が汲み尽くすことのできない残余を残しつつも諸個人のイデオロクトを駆使しながら進められる

と考えるなら、そこに機能しているのはやはり言語的な意味づけのプロセスということになるだろう。この意味においてバルトの論考はイメージの解釈という主題に対しても言語至上主義的な立場に留まっていると言える。だが、このことを差し引いてもイメージの分析という試みに関わる彼の論考は、ビジュアル・ナラティブ・アプローチの方法論上の基礎を確認する作業において示唆に富む。というのも、バルトはイメージが内包する共示を読み取る際に鑑賞者が動員する言葉の不自由さを次のように認めているからである。

共示を分析する時に生じる困難がもう一つあって、それはその独自のシニフィエに固有の分析的言語が対応していないということである。

（バルト, 2005/1964, p. 36）

ここにはイメージの言語的な解釈という実践がもつ本源的な困難への自覚が認められる。すなわち、イメージの解釈という試みにおいては、当のイメージが内包する共示を十全に表現し得る言葉が見当たらないということが生じ得るのである。さらに言えば、イメージを解釈するために選択された言葉は、その言葉自体もまたシニフィアン（表現）とシニフィエ（内容）を持っている。このことは、イメージを解釈するために選択された言葉それ自体が持つ意味作用が、目の前のイメージが内包する共示の意味との間に摩擦を起こす可能性があることを示している。こうした懸念に対しバルトは、イメージが内包する共示の意味を十全に表現し得る言葉を編みだす必要を指摘する。

したがってこれら共示の意味素を言い表わ

すには特別のメタ言語が必要になるだろう。

(バルト, 2005/1964, p. 38)

共示の意味素に名前をつける時に人工的な方法——必要な場合には破格用法——で解決することを承認すれば、それらの形態の分析が容易になるだろう。

(バルト, 2005/1964, p. 38)

イメージが内包する共示の意味を掬いとるための適切な言葉が見当たらない場合、当の共示の意味を捉えるための適切な言葉を編み出す必要を生じる。バルトはこれらの言葉は、言葉の使用法や意味の範囲が規定された辞書的な言葉ではなく、ときに造語や破格用法といったかたちで編みだされるという。彼はイメージが内包する共示の意味を適切に掬いとるために造語や破格用法を使用することを認めるならば、各々のイメージに固有の共示の意味を適切に読み取る試みの新たな地平が拓かれるという。

8. 「テキストのイメージ」から「イメージのテキスト」へ

イメージの解釈に動員される言葉が、各々のイメージが内包する共示の意味をどこまでの確に掬いとることができるか、という問いをめぐる困難を自覚しつつ、ここではテキストとイメージとの関係におけるバルトによるもうひとつの重要な指摘を確認しておきたい。この指摘は、ビジュアル・ナラティブ・アプローチは所与のテキストを視覚的なイメージに翻案する実践——テキストに挿絵を添える実践——に過ぎないのではないか、という批判に応じるものである。

イメージの分析におけるテキストとイメージとの関係についてバルトは次のような指摘を

行っている。

テキストはイメージを共示する役割、すなわちイメージに一つまたはいくつかの副次的シニフィエを《吹き込む》役割を持った寄生的メッセージとなる。言い換えると、そしてこれこそ重要な歴史的逆転であるが、イメージはもはや言葉を映像化・説明するものではない。構造的にイメージに寄生しているのが言葉の方なのである。

(バルト, 2005/1961, p. 69)

先に明らかにしたように、イメージに添えられるテキストは、当のイメージが内包する共示の意味を同定したり、誘導したりする役割を果たす。バルトはこうしたテキストの機能を「投錨」と呼んだ。さて、イメージの理解におけるテキストの役割を改めて確認したところで上の引用から注記しておきたいことは以下のことである。すなわち、イメージの可能性に照準を合わせる方法論においては、イメージを何らかのテキストを視覚的に表現し直したものとして位置づけるのではなく、イメージを宿主としてそこから何らかのテキストやディスクールが引き出される、という考え方をとるということである。バルトは、イメージの分析におけるこうした方法論上の逆転を次のように簡潔に要約している。

かつてはイメージがテキストを映像化・説明していた（より明確にしていた）。今日ではテキストがイメージを重くする、すなわちテキストが文化や道徳や想像の所産をイメージに負わせるのである。かつてはテキストの要約がイメージであったが、今日ではイメージの拡大がテキストとなる。

(バルト, 2005/1961, p. 70)

書物における挿絵のように、テキストの読解を助ける役割がイメージに付されていた時代にあつては、イメージはテキストに対して付随的な地位しか与えられていなかった。しかし、写真や映画といった媒体を含め、イメージそれ自体が人々の社会生活や思考様式に影響を与えるようになった時代においては、テキストの方がイメージから引き出されるようになる。

ビジュアル・ナラティブ・アプローチの探究においても、単に何らかのテキストを視覚的に表現し直して探究する実践——テキストに挿絵を添える実践——と解されてしまえば、その方法論上の意義は薄い。だがそうではなく、視覚的なイメージが触媒となって多様なテキストや解釈実践を生み出し、人々の社会生活に作用したり、彼らの社会生活の実像を明らかにしたりするという点に注意を向けるなら、この方法論の新たな可能性が拓かれる。この意味においてビジュアル・ナラティブ・アプローチは、テキストのイメージ化を目指した探究の方法論ではなく、イメージを起点とする探究の方法論なのである。

9. 結語

本稿の目的は、視覚的なイメージの分析を伴うビジュアル・ナラティブの探究に関わる方法論上の基礎を確認する作業に取り組むことであつた。この作業に臨むにあたって、本稿ではロラン・バルトによる『映像の修辞学』（バルト, 2005/1964）と題された論考を導きの糸として論究を進めた。バルトの同論考は視覚的なイメージの分析を如何に進めるべきか、という問いに対し、ソシユール言語学における「シニ

フィアン（記号表現）」と「シニフィエ（記号内容）」の概念を土台に論究を進めたものであり、ビジュアル・ナラティブ・アプローチの方法論上の基礎を確認する作業の出発点に適切な文献であつた。

バルトに依拠するならば、視覚的なイメージの解釈には少なからず言語的な意味づけのプロセスが関わってくる。そして言葉による意味づけは、社会-文化-歴史的な規範性を帯びたものとなる。このことは、ビジュアル・ナラティブ・アプローチの探究がイメージの解釈という実践に際してもなお、言語至上主義的な立場に留まっていることを意味する。だが、バルトが強調したことは、言葉やテキストがイメージを構成するすべての要素を汲み尽くせるわけではないということであつた。言葉による解釈はイメージを構成する各々の要素に対して選択的な言及にならざるを得ず、汲み残されたイメージの領野には意味の不在領域が広がることになる。そこにはつねに異なる解釈可能性が残されている。バルトは、汲み残されたイメージの領野に広がる意味の不在を満たす言葉に、造語や破格用法を用いることを認めるならば、各々のイメージに固有の意味を適切に読み取る試みの新たな地平が拓かれると述べた。

最後に、ビジュアル・ナラティブ・アプローチは所与のテキストを視覚的なイメージに翻案する実践——テキストに挿絵を添える実践——に過ぎないのではないか、という批判に対し、イメージの可能性に照準を合わせる方法論においては、イメージを何らかのテキストを視覚的に表現し直したものとして位置づけるのではなく、イメージを宿主としてそこから何らかのテキストやディスクールが引き出される、という考え方をとることを指摘した。ビジュアル・ナラティブ・アプローチの探究においても、単に

何らかのテキストを視覚的に表現し直して探究する実践——テキストに挿絵を添える実践——と解されれば、その方法論上の意義は薄い。だがそうではなく、視覚的なイメージが触媒となって多様なテキストや解釈実践を生み出し、人々の社会生活に作用したり、彼らの社会生活の実像を明らかにしたりするという点に注意を向けるなら、この方法論の新たな可能性が拓かれる。

引用文献

- Bruner, J. S. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Harvard university press.
- バルト, R (2005) 写真のメッセージ. バルト, R (著). 映像の修辞学 (蓮實重彦・杉本紀子, 訳) (pp. 49-81). ちくま学芸文庫. (Barthes, Roland. (1961). *Le message photographique*. *Communications*, vol. 1, 127-138.)
- バルト, R (2005) イメージの修辞学: パンザーニの広告について. バルト, R (著). 映像の修辞学 (蓮實重彦・杉本紀子, 訳) (pp. 7-47). ちくま学芸文庫. (Barthes, Roland. (1964). *Rhétorique de l'image*. *Communications*, vol. 4, 40-51.)
- 丸山圭三郎 (2008) 言葉とは何か. ちくま学芸文庫.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human sciences*. State University of New York Press.
- Sarbin, T. R. (ed.). (1986). *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. Praeger Publishers.
- やまだようこ (1988) 私をつつむ母なるもの: イメージ画にみる日本文化の心理. 有斐閣.
- やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編), 人生を物語る: 生成のライフストーリー (pp. 1-38). ミネルヴァ書房.
- やまだようこ (2002) 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス: 「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, vol. 1, 107-128.
- やまだようこ, 編 (2010) この世とあの世のイメージ: 描画のフォーク心理学. 新曜社.

- やまだようこ (2018) ビジュアル・ナラティブとは何か. *N: ナラティブとケア*, 9, 2-10.
- やまだようこ (2023) 私をつつむ母なるもの: 多文化の「人と人の関係」イメージ. 新曜社.
- 横山草介 (2019) ブルーナーの方法. 溪水社.
- 横山草介・関山隆一 (2020) 保育者の実践観の変容に関するヴィジュアル・ナラティブアプローチ. 保育学研究, 58 (2-3), 155-166.
- 横山草介・関山隆一 (2022) ヴィジュアル・ナラティブによる保育者の実践観の研究. 保育学研究, 60 (1), 21-32.